

日中：謝罪・感謝の勘違い (上)

斎藤 文男

中国の春節（旧正月）休暇中に大勢の中国人が来日して、東京・銀座や秋葉原で電気製品や日用品を“爆買い”していることが話題になった。大型店は 2 度目の正月景気ととらえ、「春節商戦」を展開し、各店の売上げが大幅に伸びたことを各メディアが報道していた。

一方では、店内で大声を上げて話をしたり、買い物の列に並ばないなど買い物マナーへの批判もあり、嫌中感情に拍車をかけている。中国に行って商店で買い物をした経験のある人は、「商品の扱いが乱暴だ」

「お釣りを投げて返す」など、中国人店員の態度が悪いことに腹を立てることが多い。

このため、日中を往来する人が増えるに従

って、国民同士の感情が悪くなり、交流が増えれば相互理解が促進するという常識とは逆になっている。この原因はちょっとした誤解や理解不足からきていると思う。

日本人は心に思ったことを直接口に出すことは少ないが、中国人はどのような場合でも自己主張をする人が多い。南京に長期滞在して“老百姓”（ラオ・バイ・シン＝庶民）の中で生活したいいくつかの出来事を紹介したい。

「なぜ、急に止まるのよ」

市内のスーパーに自転車で買い物に行った時、交差点で信号が黄色になったので止まった。すると後ろから中年の女性の自転車がぶつかってきた。交差点まではやや下り坂になっていた。

「なぜ、急に止まるのよ！」

「信号が黄色になったんですよ」

「あんたが急に止まるから、ぶつかったじゃないの」

日本人なら、後ろから衝突した方が「ごめんなさい」と謝るところだろう。しかし、この女性は、衝突の原因は前を走っていた人が急に止まったことを主張し、自分に責任がないことを強調したかったのだ。

「自転車のブレーキが壊れているよ」

同じ日の午後、同じ交差点で赤信号になったので、自転車を止めて待っていた。突然、リヤカーを連結した自転車に乗った女性が、後ろから衝突してきた。純朴そうな農村の人らしく、申し訳なさそうな表情だった。しかし、自分の主張は間違っていない、というように「この自転車のブレーキが壊れているのよ」と言った。

ブレーキが壊れていれば、急には止まらず衝突するのは道理である。乗っていた女性に責任はない、と暗に言いたかったようだった。

「乗っている自転車の安全整備をするのは、その人の責任だ」

「毎日がぎりぎりの生活で、そんな余裕はないわよ。なんなら、あんたブレーキの修理代をだしてちょうだい」



朝の通勤時刻に自転車で出勤する南京市民 (2005 年 10 月 31 日、南京市内で筆者写す)



経済の急成長とともに、あっという間に車社会となり、路地は車でいっぱい。この路地は一方通行ではない(2011年11月18日、南京市内で筆者写す)。

などと話が展開していきそうだったので、話はそこまでにした。都市と農村の所得格差は、現在の中国の大きな課題であることは理解している。が、自転車をぶつけられた被害者が、相手の自転車の故障修理代を支払わなければならない道理はない。

「卵が割れたのは、産んだ親のせいよ」

いつも行くスーパーで、20個ほど透明な袋に入っていた卵を買った。レジに持っていくと中に割れたものがあったので、取り替えてくれるように要求した。

「あんたが割ったんじゃないの？」

「持ってくるときは気が付かなかった。今ここで割れていることがわかった」

「それはレジ係（私）の責任ではないわ」

「じゃあ、一体誰の責任だというのか！」

割れた卵の代金まで支払う必要はないと思い、私は声を強めて言った。レジ係の女性はちょっと間を置いてから、強い口調で主張した。

「卵が割れたのは、産んだ親の責任よ！」

「……！！」

うまい！ここで思わず「座布団一枚」と言いたくなった。

私がレジに置いた時に割れたのかもしれない。とすれば、この責任は産んだメンドリではなく私にある。卵の1、2個は料理のときに失敗したと思えばいい、と思い直した。それになんといっても、レジ係女性の当意即妙な応答に感心した。座布団三枚を献上したと思い、料金を精算して帰宅した。

これらの見事な責任転嫁は一体どこから来るのだろうか。

(さいとう・ふみお) 毎日新聞OB。1941年生まれ。元中国・南京大学日語専攻。